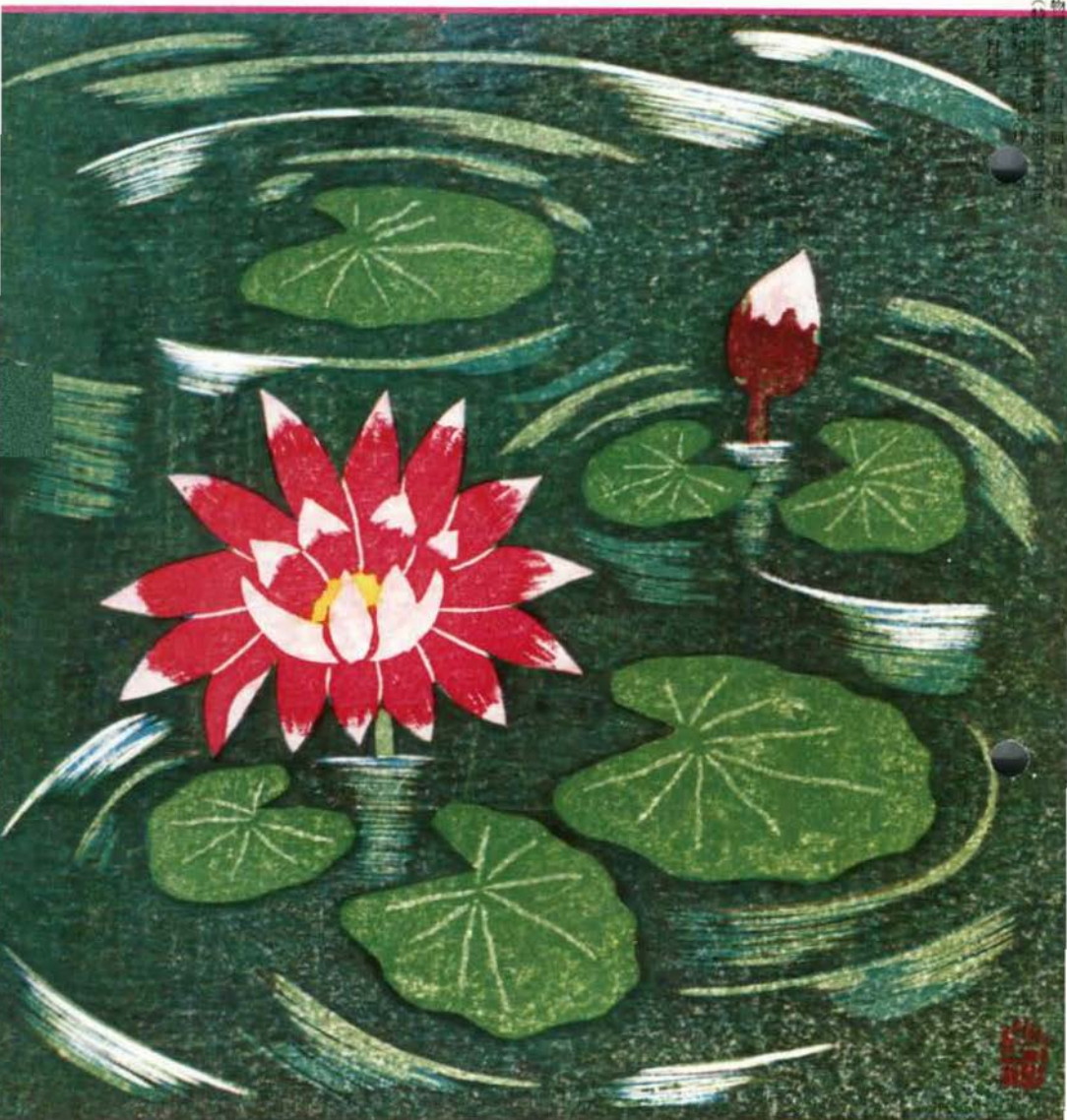


浄土

1982-6

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可
昭和二十四年四月二十八日 選給省
昭和五十七年五月二十五日印刷
第四十八卷





父の日に想う

六月の第三日曜日の二十日は、父の日である。五月の母の日に比べれば、それほど認識も高くはないが、それでも最近の風潮は、子供たちのやさしいまごころのプレゼントを誘う。これも生活の余裕からだろうが、両親とともに過ごす家族団欒の風景は、まことになかやかで暖かい。大黒柱のお父さんを中心に、お母さんとボクたち……、夕餉の香りのしみ込んだなつかしい茶の間を想い出して、父の日にかこつけて、私は少年時代を振り返ってみる。

ところで私は、昨秋、はからずも結婚させて頂いたので、今は、ありがたくも二人の父がいるのである。精一杯の孝行をして、これからの人生を楽しんでもらおうとは思いますが、言うは安くして、なかなか実行に移せることでもないような気がする。ただ、父の日だからということではなく、これからも、母のことと同じように、父についてもあれこれと心を配って行きたいとは思っている。そしてともかくも、できるだけ長生きをしてもらいたいのである。

というのも、実は、まもなくこの私自身も、父となる予定でいるからである。

(勝崎裕彦)

六月号



戒聞精進三昧智慧威徳ともがら
なく、殊勝希有なり。

——『無量寿経』歎仏頌

目次

法 話

如是修行……………佐 藤 晋 康 ……(2)

光はあまねく照っている

——精薄者とともに——……………丹 羽 演 誠 ……(6)

エッセイ 北国の便り……………工 藤 昌 瑞…………(11)

<勢至丸ものがたり>第一回

宇宙からの旅立ち……………布 村 哲 哉…………(14)

わたしのなかの詩……………霧 林 道 義…………(20)

インド文学の香り……『パーガヴァタ・ブラーナ』抄訳(Ⅰ)

子を思う母の祈り—病魔封じ—……………小 山 典 勇 ……(25)

<読者のページ>

上海・蘇州紀行……………磯 貝 基 教…………(32)

浄土句集……………一 田 牛 畝 運…………(30)

<表紙裏・巻頭言> 父の日に想う……………勝 崎 裕 彦

念仏ひじり三国志⑨——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉…………(37)

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部

話

法



如是修行

佐藤晋康

(山形市専念寺住職)

五月五日、私は自坊を明けて、十数キロ北の天童温泉に出て、副団長の寺のご法要のお手伝いをした。渋谷師とは中学以来の友人であり、現在、教化団の仕事を協同するご縁に預っている。

この日、三宝寺先住七回忌並びに、位牌堂・書院・庫裡等諸堂落慶法要が、大本山増上寺法主藤井実応大僧正台下ご親修で営まれた。

すでに、三月十一・二日の岡山誕生寺、本山寺岩間親音参拝（菩提寺は、日程都合つかず遙拝）は、宗祖ご生誕八五〇年のご勝縁を感謝して冒頭の行事となり、これに続く一連の行事に、私は乞われて、朝夕だけでもと、出来

る限りのお手伝いをさせてもらった。

百万礼拝（第二次分）、発願文十万巻写経、善導大師一三〇〇年大遠忌法要、法然上人ご生誕八五〇年慶讃法要、織田信長公四百回忌法要（天童藩主織田信雄は、信長の第二子。長兄信忠は、本能寺の変のとき、父信長に従軍して、京都妙覚寺で自殺、二十六歳。三宝寺は菩提所として、織田家代々のお位牌をお霊屋に祠っている）、東京教区の一支部を含む吉水講十一支部二五〇名の協賛参加の下に詠唱大会など、夫々日別に奉修し、さらに記念の各行事をその前後に配して、綿密に実施された。就中、四月三十日、朝六時よりの「十二時間礼拝」は、三〇分刻み、二十四回

連続の行で、僧俗とも甚だきつい修行だった。

礼拝行や写経、詠唱等は、正定業である称名念仏の助業としての行法であるにせよ、身業を合せての専修念仏に励む姿はまことに尊いものだ。

かつて開宗八百年の記念法要のとき、三宝寺で五重相伝会が開筵された。受者は、たしか一三〇〇名であったと思う。ご伝法は、故岸信宏ご門主、そして勸誠に当たられたのが、当時、岡崎大樹寺のご住職であった藤井実応上人だった。この法会を機として、第一回目の百万礼拝が発願修行され、三年にして成満し、故岸ご門主が、『知恩』誌で紹介されたように思う。写経もまた、第一次としては、心経十万巻を達成していて、現在、どちらも引続いて精進が続けられている。

こういうときに、藤井ご法主は、四日夕刻天童駅にお着きになった。山門前には、八年ぶりのご再会を待ち望む三宝寺総代、世話人、寺族、檀信徒たちが、固い合掌に親しげな眼差しで集まった。

「あの時のご前様よ。ちっとも変わらねえなあ。」

「お元氣そうで、足の軽いこと。」

檀信徒みんなの心に、信仰の灯をともしてくれた尊いお方、よき師に再会できた感激と安堵の入り交ったささやきだった。

渋谷住職の先導する藤井ご法主の後ろには、寺役員、寺族等が続いてご本尊前に詣でられ、お十念授与して、ご挨拶をされた。

「ご縁をいただいて、再びお詣りさせていただきました。明日は、ご先住の七回忌法要と諸堂落慶法要をつとめさせていただきます。思えば、先の五重相伝のときには、元氣でおつとめ下さっておられたご先住様も、七回忌になられるのですね。」

誰かがあとで、「この七年間の距りは、あのご挨拶をいただいた途端、充実感に変わってしまいました」と、語っているのが印象に残る。暗闇の心に、如来大慈悲の光明を導き入れてくれた師と、その弟子たちの心の通い合いには、多くの言葉は必要なかった。出合いの人の名を呼ぶだけで充分だった。

五十日近くを要した一地方寺院の大法会も、この法要を以って成満するところ、数日来ぐずついていた天候が、当日快く晴れ上がった。本堂を埋めずめた善男善女にとり囲まれた高い内陣には、大僧正台下を大導師に、二十数名の随喜寺院列坐して、莊嚴裡に法要はご親修された。

お別時の法要を加えるなら、数多い行事を持った大法会が、無障礙に成満し得た根本のものは、道心堅固な渋谷住職の不退転の信心と、報恩の徳心と、積み重ねられた僧俗一体の信頼心であろう。世話人や総代は勿論のこと、檀信徒一人一人が責任感旺盛に、積極的に仕事と取組んでいた。「みんな、やり遂げよう」との心意気は、毎日の礼拝もあずかって力あろう。

法会が成満した翌日の六日でも、朝夕の礼拝、自宅で浄書される写経は続いていた。月の十三日が納経日となっているそうだ。

八年前、故岸ご門主と藤井ご法主によって、五重の法窓で灯もされた信仰の光、称名念仏の光明は、今、渋谷住職を先達とする東北の一寺院で、世間を照らす大光明になろうとしている。助業併修の専修念仏の行法は、身

口意三業一体となる力強い勅的行法を以って、精進されることであろう。

五月六日、その尊きお方、藤井実応ご法主は、正十二時発八九四便に搭乗され、東北・山形空港より旅立たれている。



藤井ご法主がご帰山なさる朝、ご染筆を頂戴した。「歡喜奉行」と横書きされていた。私は、これを自坊の写経室（兼相談室）に額入りで掲げ、檀信徒と共に、日々の指標とさせていただくことにしたいと思っている。「歡喜して行じ奉れ」とのお示しと、受けとらせていただく。

話は、十年ほど遡る。社会的には、私は、総本山知恩院道場で墨書ご伝授を受けていた。例の三島由起夫が、自衛隊東部総監部の総監室で割腹自殺した昭和四十五年十一月二十五日、丁度成満の日、道場長名で呼び出され、他の二名と共に色紙を頂いた。行中の仏前奉仕は、今は交替のようだが、そのとき私は、道場中ぶっ通して

『侍者』役を命ぜられた。ただ、『導師』役が善光寺の鷹司誓玉上人のときのみを除いては。そのときの励ましに下されたものと思う。開けてびっくり、故岸ご門主のご染筆で、「如是修行」と墨痕鮮かに力強く書かれてあった。「為書き」の添書に、道場名を入れた私の名があった。帰山すると、早速に書斎に掲げ、用心のみ教えといただいた。

その前年に、自坊の本堂・庫裡の改築工事が完了したばかりだった。幸い墨書道場中は何事もなかったのが、帰山してからよく床につくことがあった。シャツ金コンクリートの建物のせいか、暖房やコンクリート自体からの湿気がやたらと多く、よく風邪をひいた。帰山当初の「如是に修行せむ」との心掛けも、次第におろそかになることが度々になった。ならじと、早朝のおつとめに、礼拝を加えた。汗が出るので『総願偈』の後に、五十、七十……と、最高一二〇礼まで行じることもあった。汗に濡れた下着を取替え、序でに乾布摩擦もやった。四年ほど続けて、礼拝行が風邪の治療と予防に効くと発見して、独り悦に入っていた。

昭和四十九年、三宝寺様で五重が開筵されて、故岸ご

門主にお目にかかる機会を得た。丁度、総本山内で不快な出来事があった時でもあり、その礼拝のことを申し上げて、お茶の話題にでもと思ったが、不謹慎な気もしたので、色紙のお礼のみを申し上げてしまった。

五十四年八月、輪番でたまたま上山したところ、その日ご入院というところに当たり、その後ご遷化になられてしまい、遂にご批判いただけずじまいになった。五十六年、再度輪番を命ぜられたときは、故高島寛我ご門主はご病床中で、八日間滞在中一回もご挨拶出来ずであった。

測らずも、今回の藤井実応増上寺ご法主のご染筆は、願ってもないご文句である。喜んで仕事をさせてもらうのは、仏教者の最も大切な心掛けであり、小さな事に打ちこめば、ものの「いのち」との出会いがある。また、宗祖法然上人が、ご流罪を朝恩とまで受けとめられた、あの強烈な伝道魂を、この「歡喜奉行」のみ教からいただいたのである。この書を拝して、皆ともに、欣然と生き住くお念仏の日ぐらしを積み重ねて行かねばと覚悟している。

法 話

光はあまねく照っている

——精薄者とともに——

現代社会に於て、障害者は平等に取扱われ、又共存への参加をしているだろうか、誰もそう思っていない。国際障害者年を国連が昨年その年とし、今年は実践第一年で向う十年間続くのであります。お念仏の元祖、法然上人のご誕生八五〇年が今年であり、凡夫の往生を説き、いかなる人もお念仏をすれば、阿弥陀仏のお慈悲に救済されると主張された法然上人の誕生を祝うことは、念仏を信仰する私たちにとって、何か深い生命への原点を考えさせるものがあります。

丹 羽 演 誠

(大分県佐賀関町正念寺住職)

『浄土』編集室から何か原稿を書く様にとのこと。障害者年実践第一年、法然上人ご誕生八五〇年の年でもありますから、障害者の中、精神薄弱者のことについて書くことにいたしました。昨年障害者のことはテレビ等で賑やかに取扱っていましたが、幸福は未だ遠きところにある様です。

× × ×

「近くに家を求めました。父親の命日です。お参り頂けませんか」の電話。家に入って何



か淋しいものを感じながら仏前に座しました。何げなくポンプを押している音が聞こえてくる、誰か風呂の水でも汲んでいるのでしょうか。と思い、誦経にかかりました。立派な仏壇、法名も立派であります。水を汲む音も止み誦経が終って、転座すると、奥様とニコニコ笑った中学生位、障害者が座している。私と同じ様に、その子供にも茶菓を用意されました。「子供さんどうされましたか」と尋ねると、「生まれて数月高熱におかされ、現況のままです。外に弟も同じく出生数カ月で高熱におかされ、男子二人が障害者です」と涙しながら、語るのです。

今の水汲の音は、この子の運動のために浴槽一ぱいになれば、一円あげることにして、手伝ってもらっています。

気の毒な心が、自然と湧いて来た。この子も、この親もどの様にして人生を渡るのであるか。この家が、後に「しいのみ学園」を開園した昇地三郎先生の家であり、最初の出会

いでありました。心重く、何とかして上げたい心でその家を去りました。

不思議なものです。私たち一家にも甥の出生が祝福されながら、全血交換をしなくてはならないこととなり、医師から機能障害がありましたようと云われた時、何かすまない心にせめられました。

どの家でも障害者が起るのであります。スタンリーの娘も、ドゴールの娘も、ケネディ家にもいることを思うと人ごとではないはずで

× × ×

M 青年が保護視察となつて私のもとに遊びに来る様になった。非行歴は、無銭飲食、自転車無断借用の繰返しであります。更生のために就職させるが三カ月をすると、「先生やめました」と云ってくる。理由を聞くと、「こんなこと出来ないか、ぐずぐずするな」と云われて離職するのです。就職の折、青年

の性格を責任者に話し、ほめて使用する様に云うが、なかなかその通りにならない。少年非行に、精薄が多いのに驚く。IQ七五以下です。そのうちに、私も精薄者のとりこになつてしまい、精神薄弱者相談員と云う、いかめしい名の職、それから十数年過しました。K 少年、自動車の運転にやつと合格したのがよいが、車に、興味が湧き、昼夜となく、車に無中。いねわり運転、やがては、海岸に転落と、その限度がなく、母親は泣き泣き相談にくる始末。

面接していると何の悪気もなく、「先生どうしてもとまらない、自身でブレーキがきかず、おそろしくなりました」との告白。

× × ×

重度は施設に、中度軽度は就職に、親はいつまで子供が可愛い、相談にくる悩みにも段階があります。発見した時、幼稚園保育園に入園、小学校に入学、中学卒業と、その間

は、ひたすら、期待をかけています。何とかなるだろうと、よくなるだろうと。近時は、重度化し就職も不可能な子供が多くなりました。障害児学級、養護学校の親の関心度は、一概に云えませんが、障害児学級の親の方が恥しいの心があり、薄い様ですが、養護学校の親は、熱心です。熱心であればある程、将来について考えます。更生施設にやるか、在宅にて見るか、在宅の福祉から就業させることに関心が出来、小規模の授産所が小人数で発足の段階となりました。

親には、心中型、捨子型、家宝型と分かりますが、菩薩の行をしている相があちこちで見られます。

授産所に通所しているS君が「先生足が重くて歩けない」と云うので、長男に訪問させ、病院に行く様にすすめました。その家は父が酒ずき、母は入院。「父が働かないので僕も仕事をしない」とS君は云う。異風な家庭です。教養学校の先生がS君に就業のため、家

庭を訪問すると、「先生帰れ」先生帰れ」と云った青年です。然し授産所に来てからは、先生が来訪した折も、写真を撮すのに、「S君いいかい」と云っている状況でしたが、「先生撮して」とポーズをするまで変りました。

長男と親は病院にS君を連れてところ、県立病院にと救急車で護送する有様。入院十四日で退院しました。この入院が父親の心を変えました。そして、仕事に励む様になったのです。S君は父を更生させたのです。親の関心度が、障害者をよく育てるものです。一般に親は消極的です。

× × ×

療育手帖と云うものがあります。精薄者の程度を記したものです。身体者手帖と同じです。その手帖が出来た折の話です。民生委員会で、この手帖の協力を要請いたしましたところ、拒否されました。

その理由は、私は馬鹿ですと云う記しを、

すすめることは出来ません。親しい人なら尚更です。気の毒で訪問出来ないとの理由です。手帖には二年ごとに診断があるので、私は、状態を知ることですすめますが、なかなか複雑なものです。

実態調査が出来ないのも、この様な障害があるのです。特に軽度の問題が多い様です。

障害児学級に入級をすすめると、親の承諾がいるのです。家庭の中で、祖父母、両親、親族となかなかむづかしく、又、地域の問題、家の問題と、壁は厚いのです。

ではどの位いるのか、私の町の実態を知らせます。毎年IQを調査します。一〇〇〇名の小中学生の中、七五以下二〇〇名、五〇以下五〇名、入級三〇名となります。

早期に方法をすれば、育つのですが六カ月、一年六月、三年の検診にすでに分かれます。よき相談者をもつことが子にとって幸せです。

× × ×

しいのみ学園の昇地三郎先生、二人の子供障害児のため全財産を投出して、しいのみ学園を開設され、先生は大学で専門は心理学です。それを応用してこの道に精進されました。長男、有道君が逝去され、法名を「椎実園有道居士」と送りました。

挨拶に立った先生は、「私にこの子供がなければ、今日の私がありません。この子供のお蔭で今日があるのです」と涙の中に語られ、協力して頂いた人々にお礼を申しました。今にも臉に涙かんで来ます。

法然上人は、どんな人でも救われる。仏の慈光を感じたら、精薄者も、同じです。みな光をもっています。口にも何にも云えないが、もくもくとして一日を教えるままだに、生きています。よき理解とよき立場を与えましたら本当にのびるのです。法然上人の生誕の記念に小さな授産施設をこの精薄者に建てました。立派に育つことを念じて、名を『住生礼讃』の音楽八風宣から、八風園と名付けたのです。



エ
ッ
セ
イ

北国の便り

工^く
藤^{どう}
昌^{しょう}
瑞^{ずい}

(弘前市西光寺住職)

北国の春は三月まで降雪に見舞われながらも、一方では目に見えてお彼岸になると大体降雪もまれになり、雪が目立って少なくなってきました。すっかり消えてしまうのは四月中旬で、それまでじっと我慢していた梅も桜も蕾から満開へと駆け足で装いを凝らしてくれます。弘前公園は五千本の桜と古城と、そして老松とを売物に、全



国否外国からも花見客を迎えて冬中堪えて来たエネルギーを一度に発散するかの様に賑わい騒ぐ二週間を過ごすわけです。こうした季節に先立って、浄土宗は宗祖法然上人の御降誕八百五十年の御盛儀を迎え、総本山知恩院、各大本山での記念行事を持ったのでありますが、私は静かに、遙かに思いを馳せて心からのお祝いを申し上げたのであります。(当寺では昨年六月に行事をすました。)

さて青森県には工藤姓がとても多いのであります。私も物心づく頃から学校へ入るようになってこの事を感じて居りました。小学校で曾我兄弟の話聞いてから、その仇工藤祐経は何て憎むべき人物だろうと思い、引いて工藤姓は嫌な名前だなと思ったものでした。祐経がその親戚の一人である曾我兄弟の父河津祐泰を殺したのは一一七六年、その前年が法然上人浄土開宗の年でした。曾我兄弟が頼朝の富士の巻き狩りを機に、父の仇工藤祐経を討ち果したのは建久四年(一一九三)五月、その時兄十郎は討たれ、弟五郎は捕えられています。その時祐経の子犬房丸がツカツカと五郎の傍に来、鞭を以て五郎を討って憎悪の目をむけました。五郎は縛られながら、「この五郎が憎かろう、思う存分打ってくれい」と云ったというこ



とです。

この頃法然上人の浄土念仏は都の人々の心を捉えて拵がつて行った時に当るわけです。曾我兄弟仇討ちはそれでも当時の人々の讃称の的であつた様です。私はここで勢至丸様と御父時国公の臨終を對比して考えぬわけにはいかないのです。即ち父の遺言に、「われこの傷痛む、他人が傷を受けたならば、定めし痛かろう。我は命惜しい。併し他人も亦命惜しいであろう。そなたはゆめゆめ定明を仇と思ひ仇を討つとは思うて下されるなよ。それより何よりこの父の菩提を懸ろに弔うてくれよ。そして自ら解脱を求めるが宣しいぞ」と仰せられて端坐して西に向かい、合掌して念仏して眠るが如く息絶えたのであります。この父の遺言は法然上人の心に固く刻まれて、「われ父の遺言わすれ難く、凡夫の浄土に生れんが為めに浄土宗に立つるなり」とそのお言葉をはっきり示されて居ります。勢至丸様の稟質が素直に父の言葉を稟けられて自行苦辛の末、末代に限りない恵みを与えて下されたことを今改めて御降誕八百五十年という記念すべき年に、浄土門緇徒の一人として、思いを新たに念仏の業に自らも励み、人にも称えしめんと意を決した次第であります。

勢至丸ものがたり

第一回

宇宙からの旅立ち



わたしは 勢至丸（せいしまる）。

わたしは 宇宙の旅を続けている。

どこまで行っても さえぎるものがない宇宙。

はてしない広がり。

そして、今もひろがりつづける。

その宇宙に あふれている 数えきれない世界。

小さいの 大きいの。小さければ小さいなりに、大き

ぬの
むら
てつ
や
布村哲哉

ければ大きいなりに 光っている ひとつひとつの世
界。

その限らない広がり の そこに満ち満ちている世界を
めぐる 楽しい宇宙の旅。

わたしと共に 旅をしてくれるのは 宇宙船「なむ
号」。

この宇宙船「なむ号」を動かしているエネルギー源は

わたしのおとうさんやおかあさん。そして おじいさんやおばあさんだ。

みんなで わたしの「なむ号」を動かしてくれていい。

だから だれでもみんなが それぞれにすてきな宇宙船を持っているはずなのだ。

君には 君の宇宙船「くいしん坊号」。

あなたには あなたの「おしゃべり号」が。

どれもが楽しい宇宙船だ。

こうした宇宙船と わたしとの旅は いつから始まったのだろうか。

昨日からのようでもあり、あるいは ずっと昔からのことのようなもある。

また、これまで さまざまな世界をめぐるてきたようでもあるし まだ小さな一つだけの世界で うろうろしているようでもある。

それが あまりにも広く そして長いのでどこからどこまでが全部で どこがその一部なのか、どこが始まりで どこが終りなのかもわからない。

こんなふうに わからないことばかりの宇宙の旅なの

だが 少しも不安にならないのが不思議だ。

これが どこまで行っても限りがなく 変化のない光景だったら きっと気が狂ってしまうだろう。

ところが この宇宙は どこへ行っても いつでも

その場その場で その時その時で だれもが『よかったね』『うれしい』ってよろこべるころなのだ。

たとえば こんなこともあった。

久しぶりに なつかしい友達と会うためにわたしは宇宙船「なむ号」で急いでいた。

完全であるはずの宇宙船も 時には故障することもある。

「なむ号」が動かなくなってしまったのだ。

あいにく あたりには救難船が見当らない。

友達と会うのは 残念ながらあきらめねばならないかと。

その時 小さな星のかげから ひょっこり顔を出した見知らぬ子供。

「ほく 宇宙船を直せる人 知っているよ。」

そういつて どこかへ行ったかとおもうと二、三人のおとなの人をつれてきた。

その人達は さっそくわたしの「なむ号」の修理を始めた。

なんのことはない。たちまち直してくれたのである。

わたしは 感謝の気持ちでいっぱいだった。

「ありがとうございます。助かりました。どうぞ修理代を取ってください。」

というとき、その人達は 手を横にふって

「いいんです。困っている時はお互いさななんですから。どうしても気持がすまないのでしたら、今度 何かで困っている人に会ったときには 助けてあげてください。」

といいながら さっさと行ってしまった。

星のかげにいた子供が

「よかったね。」

と よろこんでくれた あのうちれしそうな顔が忘れられない。

おかげで友達と楽しく会うことができたのは いうまでもない。

その話を友達にしたら いかにも同感だというふうに「そうなんだよなあ、お互いよろこび合えるのがこの

宇宙なんだから。一人一人がどこかで つながり合っているんだ。

ひとつひとつがそれぞれに

『ぼくは ここにいて いいんだな。』

『わたしは ここにいて よかったわ。』

っていつているんだから。

みんなで支え合い 助け合っているから成り立っている宇宙だ。」

友達は うれしそうに なおもしゃべり続ける。

「実は ぼくも昨日 宇宙のお花畑を旅行してきたんだよ。そして思ったね。

なんと すばらしいんだろうと。

赤い花は赤く、白い花は白く、自分の持っている特色をそのままに 精いっぱい咲いているんだ。

大きくきれいな花も、小さな目立たない花も仲よくお互いの邪魔にならないように かばい合いながら。

そこは『いやだな』『きらいだ』『こまるな』という言葉がない 明るく晴れやかな世界だ。

自分が咲きおわれば 子供へしっかりとパトントッチして つぎの広い宇宙へ旅立って行く。

かぎりなく生まれつづける宇宙へ。

かぎりなく明るい光に向って。」

友達は うっとりとはるかかなたに目をやっていたが 突然 指さしながらいった。

「地球だ。」

「あれが地球か。」

わたしも友達も 始めて見る地球。今 ゆっくりと回転しながら浮かび出る。

その時、急にわたしは 何かに引きつけられるように感じた。

どこからの引力だろう。

それは あの地球からの力らしい。

だんだんと その力が強くなる。

とどめることも たち切ることも出来ない力。

いよいよ強引に。考える時間はなかった。

「行かなければならない。」

びっくりしている友達に わたしはいった。

「しばらくの間 地球に行ってくる。これまでの旅も楽しかった。同じ宇宙の中の旅ならば 地球への旅もまた楽しいだろうから。」

あっけにとられている友達であったが、わたしの決心が固いことを知ると よろこんでまたの再会を約してくれた。

こうして わたしは 宇宙船「なむ号」と共に 地球へ向った。

いつの間にか 二つの白い旗が「なむ号」の先端にひるがえり 宇宙船をみちびいているようだ。

中国山脈の春霞をわけて 旗が舞い降りる。

西暦一一三三年、日本では長承二年、平安時代も終りに近い。

たんぽぽや れんげ すみれの花の咲きみだれる 四月七日。

月七日。

美作（みまさか）の国は 武士の家の庭にそびえる大きなむくの木。

「あれあれ、漆間（うるま）さまのむくの木に。」

畑仕事をしていた若い百姓が さげんだ。

「ほんと あれは一体なんでしょう。」

百姓夫婦の大声で 村の人たちが集ってきた。

「白い布のようだね。」

「お祭りのときに使う旗じゃないかな。」

「昔から おめでたいことがあると 天から旗が降って
いうじゃないか。」

「そうすると 漆間さまの家に おめでたいことがあつたのかもしれない。」

むくの木のこずえで 鯉のぼりのようにひるがえる二本の白い旗を見あげながら 村人は 口々にいい合っている。

「おめでたに違いない。」

「きつと そうだよ。だって 漆間さまもその奥さまも
これまで子供がなかったの で ほしいほしいといってお
られたもの。」

「そのために 神さまや仏さまに おいのりしていらした。」

「毎朝毎晩、それはそれは一生懸命にね。」

「奥さまは いつもおっしゃっていた。『子どもはわ
たしたち親のものではありません。ほとけさまからお
あずかりするものです』とね。」

そして 常々 御主人の漆間さまもいっておられた。
『ほとけさまの中から生まれてくるわたしたちだ。だれ
もがみんな ほとけさまの子ども。』

どうか わたしのところへも ほとけさまの子どもを
おあずけください』と。」

青空におどる二本の白い旗。

この二本の旗が 二人のねがいとなって わたしを宇
宙から呼び寄せたのであろうか。

わたしは ここに誕生した。

父は 漆間時国（うるまのときくに）。

母は 秦氏（はたうじ）の美しいひと。

今の岡山県久米郡久米南町、新幹線岡山駅から津山線
に乗り換え、旭川の清流をながめながら約一時間。

美作国久米南条稻岡庄（みまさかのくにくめなんじょうい
なおかのしょう）。

ちょうど 八百五十年の前である。

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』誌の遅配が続いており、まことに申し訳ありません。

どうか今後また、『浄土』誌の充実のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、大西耕三先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20 cm × 30 cm 位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30 cm × 50 cm 程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度分、九月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―八七

わたしのなかの詩

霧^{きり} 林^{はやし} 道^{みち} 義^{よし}

(詩人)

詩や歌というのは、言うまでもなく、作者が自分の思った事、感じた事をはばかる所なくうたいあげてゆこうとするものです。

大野晋氏の説によると、

ウタフという言葉は、ウタテ、ウタガフなどと語根を同じくする。ウタテという語は、もともと恋しい、逢い

たい、などと、みな自分の気持ちが一つの方向にずんずん進んで、手がつけられない状態を表す言葉であった。これが平安時代になると、程度が甚だしくすんで、普通と違うさま——をいうようになる。だが古い根本の意味は、「自分の気持ちがどんどん進む」というものであった。ウタガフというのは、一つの既成の事態があるのに対して、それを信じないで、それに対して自分自身の

考えや気持ちを積極的にさしはさんでいくことだ。つまり、ウタガフという言葉には、自分自身の気持ちを進んで介入させるという根本の意味がある。だから、ウタガフは「ウタ」と「カフ（交フ）」との複合語で、ウタ（つまり、進んでいく自分の気持ち）を事態に対して「交フ」（ぶちがえにあてる）というのがその語源と考えられる。こうしてみると、ウタフというのは心に湧きあがってくる想念を、そのままどんな言葉に表すことだと考えられる。

氏は、このように言っています。

私たちは、こうした自分の中に湧き上がってくるものを、言葉に出そうとする衝動を持っています。そして又、現代の文学は、個人の自我の主張を旗じるしのようにしています。

それからまた、この表現しようとする衝動は、特に青年期において鮮明に出てきます。だから、青年というのは率直です。自分の思ったことは、あまり周囲のことを顧慮せず、どしどし発言したり行動したりしていきま

る時もあります。この頑固さは、時に人を傷つけます。ひいては自分をも傷つけます。

青年の持つ頑固さの中には、気取りがあったり、やせがまんがあったり、見栄坊な所があったりします。こういう青年のタイプに、私は石川啄木をあげることが出来ると思います。

啄木は明治十九年（十八年説もある）、浜民に生まれました。十七歳の時、盛岡中学を中退し、文学で身を立てようと考えて上京します。十八歳の時、作品は「明星」などに載るが収入がなく、その上病気になるたりして、父に連れられて帰郷します。二十歳の時、詩集「あこがれ」を出します。所謂文名はあがっていくが、一家五人の扶養の責任などを背負って、実生活は彼を苦しめていきます。小説を書いて経済的自立をはかろうとするが、暮らしは苦しくなるばかりです。二十二歳の時、函館に行きます。しかし大火のため職を失い、小樽に行ったりしています。二十三歳の時、釧路新聞社に入社します。しかしここも意に満たず上京します。二十四歳の時、家

族を函館から東京に呼び寄せます。東京の生活で、妻と母との不和がこうじ、遂に妻は長女を連れて盛岡の実家に無断で帰ってしまいます。

こうしたことを契機として啄木は文学と実生活との関係、文学の本質や目的を考えるようになっていきます。

この年（明治四十二年）、彼は「食ふべき詩」という一文を東京毎日新聞に発表しています。

啄木は、ここで詩とは何か、を考えています。これまでの作は、空想や因襲的な感情によりかかっていた、自分の実感をうたっていないか、と反省します。

詩人とか天才とかという揮発性の言葉に酔っていたのではないか。それからまた自分の境遇にむやみに反抗して、その結果、食を求めて流れ歩いてきた一人の人間の姿を見つめていきます。そして空想的文学を排して、実生活から立ち上ろうと考えていくようになります。啄木は「詩人」とは何か、を問いつめていきます。

『詩人とは、先づ第一に「人」でなければならぬ。第二に「人」でなければならぬ。第三に「人」でなければ

ならぬ。さうして実に普通人の有っている凡ての物を有っているところの人でなければならぬ』

と考えます。

『餓えたる犬の食を求むる如く唯々詩を求め探している詩人は極力排斥すべきである。意志薄弱なる空想家、自己及び自己の生活を嚴肅なる理性の判断から回避している卑怯者、劣敗者の心を筆に口にして僅かに慰めている臆病者、暇ある時に玩具を弄ぶやうな心を以て詩を書き且つ読む所謂愛詩家、及び自己の神経組織の不健全な事を心に誇る偽患者、乃至は其等の模倣者等、すべて詩の為に詩を書く種類の詩人は極力排斥すべきである。無論詩を書くといふ事は何人にあつても「天職」であるべき理由がない。「我は詩人なり」といふ不必要な自覚が、如何に従来の詩を墮落せしめたか。「我は文学者なり」といふ不必要な自覚が、如何に現在に於て現在の文学を我々の必要から遠ざからしめつつあるか。

即ち真の詩人とは、自己を改善し自己の哲学を実行せんとするに政治家の如き勇氣を有し、自己の生活を統一

するに実業家の如き熱心を有し、さうして常に科学者の如き明敏なる判断と野蠻人の如き率直なる態度を以て、自己の心に起り来る時々刻々の変化を、飾らず偽らず、極めて平氣に正直に記載し報告するところの人でなければならぬ』

啄木は、これを書いて三年目の明治四十五年に、二十七歳でなくなります。

私は、彼のこの指摘は正しかったと思います。われわれは普通の人間に立ちかえって詩を考えてゆかねばならないからです。

私たちが、普通の人間の暮らしている世の中を見わたしてみると、例えば、次のような人たちが目に入ってきます。すなわち、年をとるに従って、だんだん懐が広くなり人間的理解を深めていく種類の人たちです。また一方に、年をとるにつれて、心が次第にボロボロになっていく人たちもいます。

これは、どういふところにその違いがあるかという

と、前者のような心豊かな人は、いつでも自分や他人を含めた全体の調和ということを考えているようです。そして、その調和の中に、自分の心からなる安らぎを覚え、そして生甲斐を感じている人たちです。

一方、後者のような人たちは、自分の事だけにしか頭がまわっていなかった、つまり、おれが、おれが、という人たちのようです。

詩を書く人たちの中にも、これに似た人たちがいます。即ち、年と共に深まり奥行のある詩を書いていく人たちがいるかと思うと、いつまでたっても、人間の疎外感や虚無感ばかり書いているのがいたりするのです。

私たちは、いつでも生命的でありたい。生命的であるためには、自分と、この世界とのより深い調和を求めて行かなければなりません。しかし、この事は大変むづかしいことです。でも、そういう生命の中にしか生命的なものは望めません。

一方、疎外感や単なる孤独感を表現することはむしろ易しいのではないか。なぜなら、そういう非生命的な生活をするのには、自分勝手に生きさえすればよいのですから。

私たちの詩誌の仲間であった中山輝氏は、次のような詩を残しております。

今日いちにち

今日いちにち いやいや ただいま限りの
瞬間瞬間の いのちだから

つきとばされれば つきとばした人に

足を踏まれれば 踏んづけた人に

つい思わず「すみません 有難う」とつぶやいてしまふ
名なし草のように 貧しく愚かでも ありのままに生か

して貰っている証を

生身なまみに教えてくれる人々に

今日いちにち 瞬間瞬間に 思い残すことなく最善を尽
くすことができれば

今夜深い眠りの谷底へおちこんだまま

永久にめざめることがなかったとしても

誰彼に「すみません 有難う」と呟いて

ぎりぎりに張りつめて 限界いっぱい生きている石にな

れて

精いっぱい 瞬間瞬間に最善を尽くしている名なし草に
埋れて

蹴られれば蹴られたなりに空を泳いで限界に安座できよ
う

本来の空しさに戻れないのはさびしいが それはそれな
りでいいのだから

詩集・八木になった魚▽より

私たちは、どちらかというところと気の合った人々と共に暮
らして行きたいと思えます。しかし現実の生活では、気
の合わない人々とも、やはり暮らしていかなければなり
ません。

そういう一見、自分にとって都合の悪い人たちと過ご
していて、たとえば、この中山さんは、より深い人間的
存在を自覚してゆく、あるいは、自分をより高い世界へ
と導いてゆく、そういう活力に満ちた詩人であったよう
に思います。

(中心輝氏、昭和五十二年喉頭癌のため死去。行年七十二歳)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

インド文学の香り……『バーガヴァタ・プラーナ』抄訳（一）



子を思う母の祈り

—病魔封じ—

小山典勇

福德あるシユカは語る。

ナンダは道すがら、ヴァスデーヴァの言葉を無益ではないと考えつつ、前兆の接近を心配して、至高神ヴィシヌに助けを求めた。

一方カンサに命令された幼児を害する、恐ろしいプー

タナーが、町・村・牧草地などで幼児を害しつつ歩き回っていた。

どこであれ、羅刹を滅ぼすという、サードヴァタの主の御名を聞くことがないところでは、鬼神は自己の行為を行う。

虚空を飛び・思うがままに行くことができる、かのプ

「タナーは、時にナンダの牧草地へ近づき、幻力によって、自身を女にして、侵入した。

髪の束にジャスミンをからませ、大きい尻・胸、ほっそりした胴、美しい衣をつけ、耳飾りをゆらして、その輝きに、より輝やく髪を飾りとする顔だち。愛らしいほほえみと流し目を流すことによって、牧草地の人々の心を奪う。かの女を、牧女たちは、まるで美の神ジュリーが姿を現わし、蓮を手にも、夫に会いに来たのではないかと思つた。

さてこの、幼児を捕える者は、子供たちを見分けつつ、偶然ナンダの家で、まるで灰の中におかれた火のように、ベットの上に自らの光輝につつまれている、悪人を滅ぼす、幼児を見た。

動・不動のものの本質であるもの（その子）は、彼女が幼児の悪病を持つ者と知つたが、眼を閉じたままだった。心を愚鈍という縄に縛られた者は、死んだ蛇のように眠っているクリシュナという幼児を膝にのせた。

さやにおさめられた刀のように激しい心と愛らしいしぐさの、うるわしい女を見ると、母親はその輝きに負かされて、ただ見るだけで立っていた。

恐ろしい抱擁と共に、衰えない、張りのある巨大な乳房を彼に与えた。その時至福者クリシュナは、両手でしっかりとつかんで、その生命と共に怒つてのみこんだ。

彼女は「放せ／放せ／」と言って、すべての生命の急所をしぼりとられつつ、一瞬目をまわし、両足両腕を激しくふるわせつつ、身体に汗をかき、叫んだ。

彼女の大変に深みのある、突然の声によって、山を含む大地、星を有する天上は震動した。地獄や諸方には、こだまが生じた。人々は雷の落下を恐れて、地に平伏した。

こうして夜になると動き回る者は、乳房を失い、生命を失い、口を開き、髪・足・腕を伸ばして、牧草地で本来の姿にもどつて、まるで雷に打たれた悪鬼ヴリトラのように、倒れた。

その身体は倒れつつ、六クロージャ内にある木々をへし折つた。それは驚くほど巨大であった。

柱ほどの長さのある巨大な歯や口、山の洞穴のような

鼻孔、恐ろしい岩山のような胸、散乱した赤い髪、暗黒の穴のような深い眼、砂浜のような腰、帯を結んだ腕・腿・足、水のない湖のような腹。その身体を見て、牧人や牧女は驚いた。しかしそれ以前に、その音に心も耳も頭も割られていたのだが。

そして彼女の胸で、何事にも恐れなく、遊んでいる子供に、畏敬の念を生じ、牧女たちは急いで近より抱いた。

彼女たちは、その母ヤシヨードーやローヒニーと共にあらゆる面にわたって、子供の守護をした。牛の尾を振ること等によって、牛の尿・牛の塵・糞によって子供を洗い、身体の十二カ所を、御名によって守護をした。

牧女たちは水をかぶり、そしてまず自分の身体や手に御名を記し、次に子供の身体に、御守護のビージャ・ニヤーサを行った。

アジャがお前の足を守りたまえ。アニマンが膝を。ヤジュナが腿を。アチュタが腰を。ハヤースヤが腹を。ケーシャヴァが心臓を。イナが喉を。ヴィシヌヌが腕を。

ウルクラマが顔を。そして、イーシュヴァアラが頭を守りたまえ。

円盤を持つ者は前に居て守りたまえ。棍棒を持つ者は後に。両側に、弓・剣を持つマドゥ殺害者とアジャナが。ほら貝を持つウルガーヤが四角に。ウベーンドラが上に。タリークシャが地に。鎌を持つブルシャがすべてにわたって。

フリシーケーシャが感覚器官を守りたまえ。ナーラーヤナが生氣を。白い島の主が心を。ヨーガの主が意を。ブリシュニの胎児が、理性を。最勝の至高尊がアートマンを。ゴーヴィンダが遊んでいるお前を保護したまえ。マードヴァが寝ているお前を。ヴァイクンタが歩いているお前を。シュリーの夫が坐しているお前を。あらゆる病魔に恐怖を生ずる祭式の享受者が、食事するお前を。

幼児を襲う病魔、狂気、病氣、肉体と生氣と感覚の敵であるもの、夢中の前兆、そして老人・子供を襲う病魔たちすべては、至高神ヴィシヌヌの御名を唱える恐ろしさをもって滅亡するように。

福德あるシユカはさらに語った。

このように愛情に結ばれた牧女たちに保護された幼児に、その時母は乳房をふくませ、坐らせた。

さてマトラーから牧草地に来たナンダ等の牧人は、ブーターナの身体を見て大変驚いた。「オーノあの子は聖仙として生まれたのか。あるいはヨーガの主であるのか。なぜならヴァスデーヴァが言った前兆が見られるから。」

さて牧草地に住む人々は、ブーターナの身体を斧で切っては、遠くに投げ、そして薪とひとくるみにして焼いた。

クリシュナにくらいつかれて直ちに罪を滅した・焼かれる身体には、煙と蘭のような香が生じた。

世間の幼児を害し・血をすすする羅刹のブーターナは、クリシュナに乳房を与えて、彼を殺したい一心であつてさえも、善い結果を得た。

情の深い母親のように、淨信・誠信をもって至高神ク

リシュナに貞節である人が、どうして最愛の彼を得ないであろうか。

世間の名士たちによって賛嘆され、崇拜者の心中にある二つの「足」によって、至高神はブーターナの身体を踏み、乳を飲んだ。かの鬼神も母のまねごとをし、生天を得た。どうしてクリシュナに乳や乳房を飲まれた母や牛たちに何もないであろうか。

幸福をすべてのものに与える至高神クリシュナが、息子への愛情から流出する乳を飲んだ女たち、かつまた絶え間なくクリシュナに息子という視線を投げかけている女たち。彼女たちにとって、無知に起因する輪廻は決して考えられない。

焼き場の煙のにおいをかいで牧草地の人々は、「これは何事だ。どうして。」と言いつつ、牧草地へ帰つて来た。

彼等はそこで、牧人たちに説明されて、ブーターナの襲来などを聞き、その滅亡や子供の幸運に大変驚いた。

氣高いナンダは、近寄ってきた自分の息子を抱き、頭

にキスして、最上の喜びを得た。

クリシュナの子供の頃の、不思議なこのプータナーの解脱を、心から聞くならば、人はクリシュナに喜びを見い出すであらう。

〈第十卷六章一四四句〉

〔解説〕

インド教徒の古聖典『バーガヴァタ・ブラーナ』は、インド教の至高神ヴィシュヌの化身、クリシュナの行為を賛美し、大衆の心に信心帰依の道を平易に説きあかすものである。

ここでは主人公クリシュナの幼児の頃の出来事として、鬼神・病魔の襲来とその退治、幼児の健全な成長を祈る母の姿が巧みに描かれており、インド古代の習俗の一端をうかがい知ることが出来る。

なお登場人物の名は統一したが、守護を願う場面ではそれぞれの名が、至高神の他の物語りに関係するので、あえて列挙した。

好評

総本山知恩院
大本山増上寺
大本山善光寺大本願
布教師 小布施弘学著

『伝統の変容と進化』

―仏教的視点より現代人への提言―

○難解な仏教の教えを、新しいセンスで分りやすく説いた待望の布教書。篤実なる伝道者小布施師の名調子が、一気呵成な筆致で展開される。
すでに三版を重ねて、好評発売中。

B 6判 二三〇頁 価一五〇〇円

(二二五〇円)

(申し込み先)

〒381-12 長野市松代町東寺尾三八八一

長 明 寺

振替(長野) 一四三二二

浄土句集



祖山にて行脚満行花浄土

福岡 行正 明弘

評 本年は浄土宗の元祖法然上人の御誕生

八百五十年であります。御誕生地の岡山の誕生寺より、御往生の京都の総本山知恩院まで、浄土宗の青年僧が、上人が歩かれた道を十日間行脚して、御誕生日の四月七日に満行されました。丁度京都には花盛りで、東山は花の浄土でありました。

東京 新井 新生
菩提寺や大銀杏にも春の風

評 法然上人の父は四十三歳で悪人に夜討され、父の遺言に依り出家されました。津山の奥の寺には有名な大銀杏がありま

一田牛畝選

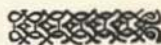
す。吹く春風は有難いお慈悲の風とも思ふ。

御忌桜満開の日の母忌日

福岡 原 敬二郎

評 総本山知恩院には大殿より阿弥陀堂をつなぐ長い廊下があるが、その両方にある桜が、四月の御忌大法要中には満開となり、その桜は御忌桜と呼ばれている。その頃が母の祥月命日とは、善い時候に本山詣りをして、桜も賞めて都踊りも見て、無ぞかし花の京を満喫して楽しいことならん。

東京 真野よし子
大ふぐり赤いサンダルぬいてあり



評 大ふぐりの庭より座敷への沓脱石に赤いサンダルが脱いである。脱いでいる座敷の娘は可愛いに違いない。

膝に来て見真似ね手合す彼岸の子
福岡 深井 鉦士

評 拝んでいる母の膝に幼子が来て、母を見真似て手を合せている。こんな家庭はまことに尊いものがある。

御陵山よけて開墾山焼ける
福岡 高良 慈風

評 薬火葬いた斉明天皇の御陵山をよけて開墾されているのであろう。近く温泉もあり、開墾されて葡萄園となるのか知ら、焼く山の煙は棚引いている。

大分 丹羽 難中
囚徒にも花見と楽し行事あり

評 受刑者のためにも沢山の桜が獄庭に植

えてある。その花見は楽しいものならん。

東京 猪瀬 幸子

夕東風や年へて尚も母恋し

鶯や合格報らす娘の電話

三重 山田 うた

天神の梅をかぶりて太鼓橋

東京 吉原登起子

幸あれと寺の福豆戴きぬ

東京 末常てる子

莫塵かざし雨に追はるゝ花見客

福岡 権藤みき

ゆつくりと緋鯉むきかえ雪の池

東京 栗原とも子

日だまりの梢咩鳴きおぼつか

東京 田中 秀代

つれ添うて四十年の歲月春の旅

福岡 荒牧 還愚

アルバムに独りかたりや春炬燵

東京 阪入志津枝

道の端の風ふれやすき薺花

京都 安藤平次郎

落椿そのまゝ水に浮かしけり

東京 吉田ゆきゑ

クロツカス一斉に咲き日脚のふ

東京 満尾衣有子

春風に胸を開きて散歩かな

福岡 行正一如子

就職の決まり酌む酒熱燗に

福岡 上滝津弥音

ひたすらに春待つ日々でありたるに

福岡 服部 光代

国宝の弥陀の堂裏路の臺

福岡 前田 秀峰

山城の跡に陽を浴び草萌ゆる

山口 三井 寛静

数珠もんで童女拌める涅槃像

山口 上野 明達

まんざくや黄の昏れ残る柚の道

東京 細田 初枝

薄氷を蹴りつ少年坂長し

東京 小笠原香祥

田植すみ本山詣り楽しみに

一田 牛畝

三重 森 静枝

寒椿能楽堂の板上る

東京 栗原やえ子

上海・蘇州紀行

磯 いそ
貝 がい
基 き
教 きょう

（甲府市尊祿寺住職）

中国蘇州寒山寺行は私の長年の希望であった。寒山寺は何かしら不思議の魅力と鵬外の小説、寒山拾得をよんだ関係からだと思う。昭和五十六年は、色々の行事がたて込んで、ようやくと師走の五日に訪中することが出来た。上海から蘇州への旅である。中国の華東は、長江と黄河がはぐくんで出来た大平原で、歴史的にも日本とかかわりの深い地域で、とりわけ美しい風光と史跡にめぐまれた

江南の地は、昔から日本の文人が多く遊んだという。かつての王城南京、鑑真ゆかりの揚州、「天に極楽あり、地に蘇杭あり」とたとえられた水の都蘇州。そして中国最大の総合的工業都市上海では、四つの近代化に取り込む中国の新しい姿を見ることが出来た。

まず午前九時半、成田発にて約四時間で上海虹橋空港に到着、午後一時に静安賓館に落付いた。それから上海市内観光である。上海



は国際色の豊かな都会で、南京路などの繁華街では、ショッピングの外人が多く、最近の流行は、上海からだといわれている。市内のあらゆる所はプラタナスが茂り、市民が忙しそうにざわめいている。公園は休日を楽しむ恋人達が、とても情熱的でものおじしない上海子の気質をよくあらわしている。女子の服装は、極めて質素でズボンにセーターで、お化粧などは全然していない素朴な姿である。

商都上海は、いまや重工業都市としてもめざましく、早朝から夜遅くまで活動をつづけているという。驚いたことに、市内の車はバス、トロリーバス、トラックで、タクシー、乗用车などはほとんど見うけられず、ただ町は自転車と人並でこった返している。上海は市民一千百万人をかかえ、町の繁華街上海銀座黄浦江のほとり、町のあらゆる所は色あざやかな看板が目立ち、町のいたる所は街路樹と人々でこった返している。バス、トラックの往来ははげしく、市民はどこでも横ぎって通

るといった具合で危険そのもので、上海のなやみは交通混乱地獄だということだ。市民の服装はつめえり服と例の帽子、ごく質素で生産国らしい。

上海は中国最大で、そして唯一の千百万人都市で東京を追いこし、世界第一位だ。重工業生産と商業活動は、中国経済の中心で古き都市北京に比べると、近代的国際都市である。中国共産党毛沢東、魯迅をはじめ進歩的な学者や、作家が輩出し、学生労働者が革命の起爆役を果すなど、革命の伝統的な都市である。質素な服装の群衆が、町にいっぱいいたむろしてこった返しているが、私の見る所では文化、工業、農業などあらゆる点で、大変おくられていると感じた所、灰色の町上海という感が強かった。

○馬橋人民公社

まず私達が訪れたのは馬橋人民公社だ。約半日の長い間の見学である。上海郊外の豊かな



な農村地帯である。郊外は広々とした農地で、多くの農民が水かけ、肥料などせっせと働く姿が見られた。いまは農工が互いに近接し、生産に助け合う公社付近は、運河クリークが多い土地がらだけに、水利化は進み、機械化、化学化、電化の四化については模範地帯だという。

私達は公社の応接で所長の話を聞き、質問など一時間あまり親切に対応してくれた。あと公社の作業場、展示室など見学した。

公社にはまた、中学校、小学校、幼稚園などの設備もあり、幼稚園児の可愛い遊戯などの歓迎あり、心のこもったもてなしには深く感動した。

あと公社の住宅など見学した。二階建ての質素なかまえて、入口には大きなシナ鍋などあり食堂となっており、七十歳位の老婆がurus番で日常生活の話などきいた。二階は寝室で夫婦の部屋、小供の部屋などに分かれており、さっぱりした寝台、家具などがかざられ

ていた。風呂は日本の大きなタライのようなもので行水だという。

生活はまあまあといった所で月給は月七千円位だという。素朴な農村地帯で、道路、家のまわりはワラのたい肥が所せましとばかり並べられてあった。

○虹口公園、魯迅の墓

虹口公園は大衆の雑踏がはげしく、彼等はただ黙々として歩いている。広々とした公園内は、アベック、家族づれが多い。ここには革命作家魯迅を記念する墓と記念館がある。

魯迅は日本の仙台で医学を学んだが、「身体をなおすより社会の病を治す」ために帰国し、文学活動に入り、弾圧に対する戦い、生活苦との戦いを進めたが上海で死去した。墓は虹口公園の中央にあり、椅子にかけた像もある。墓は大きな石に毛主席の筆の墓じるしがあり、市民の捧げる花束が並んでいた。

あたりは緑につつまれていて、若者たちの



真剣な大極拳があちこちで行われていた。これは健康にも美容体操にも役立ち女性の姿も多い。

○予園

四百年の歴史をもち、設計は精巧をきわめ奇異特殊な林園だ。あづまや、高台、筑山樓閣、池など奇異の景色である。様々な怪獸で飾られた予園の塀は珍重そのものである。上海には名園が少く、予園を眺めていると中国の伝統の厚みが感ぜられる。

○玉仏寺

市内西部にある。相変らず参拝の客でこた返している。寺の名前はビルマからもたらされた二体の白玉の仏像にちなんでつけられたという。一体は二メートルも越える大きな座像。もう一体は寝姿を表わした仏陀臥像である。他にも北魏時代の仏像や写経などの文化財がある。

そして最後には、上海動物園にかの有名なパンダだけを見にいった。大きな園内を三十分も歩いて、ようやくとお目にかかれたというわけだ。

○蘇州へ

上海から蘇州へは急行列車で約一時間半だ。上海駅は広大で近代的建物だが、駅前は人、車でごった返した。待合室はゆったりと豪華でソファード。列車も日本にくらべ実に清潔で広くテーブル付きだ。我等は一等車におさまったが、共産社会主義国で一等、二等の区別があるのは不思議な気がした。とにかくさっぱりした車内で茶の接待もあり、中国の書画など見ながら広々とした平野とクリークの多い豊かな眺めを楽しみながら目的地蘇州に到着した。

江南の景勝地である蘇州については、いずれまたお便りしたい。

◆◆◆「浄土句集」欄への投句のお願い

— 及び俳文等の寄稿のお願い ◆◆◆

『浄土』誌本文中のオアシスともいうべき、「浄土句集」欄は、選者であるホトトギス同人一田牛畝先生の献身的なご尽力と、あわせて熱心な俳句を愛する会員諸兄に守られて、二ページながら情味と、季節味に富んだ味わい深い俳壇を作っています。心をこめて作句され、熱心にご投句される皆様方へ心から感謝させていただきます。

さて、この「浄土句集」欄へ、どうぞほかの同心の方々もできるだけ多くご投句していただくことをお願いし、また重ねて俳文や句会便り、あるいは俳句にまつわる折々の随想等をご投稿いただくことを、ここに衷心よりお願い申し上げます。

左記要領で、くれぐれも宜しくお願いします。

一、内 容 俳文、句会便り等の随想

一、枚 数 四百字詰用紙八枚半程度

一、締 切 毎月五日

法然上人鑽仰会

念佛ひじり三国志

(なせ)

―法然をめぐる人々―

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



月かげのいたらぬさとはなけれども
ながむる人のところにぞすむ

浄土宗の宗徒なら誰もが知っている法然上人の御歌で

ある。「浄土宗宗歌」にさえなつて、津々浦々の浄土宗寺院で歌われている。宗立高校ではこれを校歌とし、その高校が甲子園野球で勝利したとき、テレビで全国にも歌詠のメロディが流れたものだった。

ところがこの御歌が、いつどこで作られたものか、不明にして筆者は知らない。宗門の誰にたずねても同じ答えがかえってくる。

文献はわずかに後醍醐天皇が勅した「続千載和歌集」に二条為世が撰して収載したもの、とあるだけである。今更に追跡するすべもないわけだが宗歌として制定した以上、せめて歌の真意だけは伝えておかねばなるまい。

讃岐へ流罪となる直前の法然が、熾光まばゆかった小松谷の廃堂に棲んで、没落した人工美と自然の月光とを対比しながら、古き常行三昧から新しき専修念仏への飛躍を、いよいよ胸で確信した「第三の回心」を歌境に託したとみるべきか。

「第三の回心」とは何か。

その第一を承安五年（一一七五）比叡山黒谷を捨て去って、独自のひじりの道を歩きだした四十三歳時に指摘するのは当然であろう。「新しき宗教者の誕生」であった。

第二の回心は建久九年（一一九八）としたい。個人の信仰を止揚してあまた門弟を糾合、念仏ひじりの団結である。「選択本願念仏集」を撰して、三昧発得した六十六歳の法然にこれを汲み上げたい。「新しき教団の出発」であった。

そして第三が、この建永二年（一二〇七）の冬だ。襲い

かかる法難に屈せず、念仏への信心いよいよ深く、たとえ死刑に処せられようとも、と不退転の決意を披瀝したこの時期の法然像に「永遠の聖者」を発見するのである。

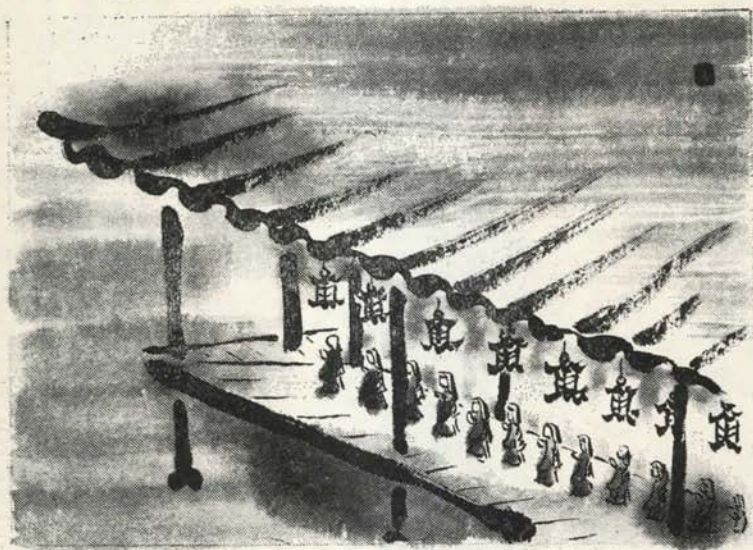
寒風吹きすさぶ小松谷の廃堂に坐して、七十五歳の老い病んだ肉体も忘れ、頼りなげな月かげのなかに、眺むる人の心に澄む弥陀の光明を摂取する大聖者の巨像を見る。

「小松とはたれかいひけんおぼつかな、雲をささふるかまつの木を」——小松谷での法然御歌と言われるこれを、「月かげ」と並べて味詠したとき、宗歌となるべき宗教情景が鮮明にひらけてくるのをわれわれは実感するのである。

おぼつかなげな松の枝ぶり。かぼそい月かげの光り。それは權威も武力も、きらびやかさも持ち合わせてはいないかもしれない。庶民大衆の生きざま、そのものである。

しかし、このおぼつかなげな松の枝ぶりが巨大な雲を支え、万遍なく光りを投げかける月かげが人の世を洗い浄める。栄枯盛衰のない永遠に生きる念仏である。

<燈籠堂>



村瀬 秀雄 著

|| 新刊 ||

『全 訳 法然上人勅修御伝』

B 6 判 八四七頁 価六八〇〇円

|| 好評 ||

『和 訳 浄土三部経』

B 6 判 四七四頁 価二五〇〇円

『和 訳 法然上人選 択集』

B 6 判 三八七頁 価二五〇〇円

『和 訳 善導大師観經四帖疏』

B 6 判 五八四頁 価三五〇〇円

『和 訳 善導大師六時礼讃』

B 6 判 二六五頁 価二四〇〇円

取扱い 法然上人鑽仰会

あえてこの時期を法然「第三の回心」としたもう一つの裏付けとして、筆者はその健康を取り上げたい。

数年来の法然が、おこりに悩まされた病身であったことは諸資料が一致して裏付けている。年齢も七十の坂を大きく越えて、この建永二年の三月十六日には、讃岐へ向けて流罪の旅にのぼるのである。それまでの法然は殆んど京都を離れたことがない。

あの病身はどうなっていたのか。流罪であるからには供の者も殆んどなく、苛酷な旅だったことが想像される。何がその法然を法耐えさせたのであろうか。

筆者は、かねてから疑問をいだいてきた。

新たな決意、宗教上の「回心」なくして播磨、讃岐のスケジュール消化は考えられない。しかも各地で念仏教化の手を休めようとはしない法然であった。

この法然における「第三の回心」を裏付ける資料は何もない。わずかに小松谷の御歌を「月かげ」と結びつけることによって、新生の像が浮かび上がってくるであろう。

さらに「月かげ」の歌意を一步深く掘り下げてみれば、「いたらぬ里はなけれども」の句に、これから出発

する未知の四国という土地が法然の胸で揺曳していたか、ともおししのばれる。

一一

白河岡崎の新御所を背景とした高倉邸は、ものものしい警戒ぶりであった。二十名近い武士たちが黒大門をかためている。

「検非違使の手の者たちだな」

黒大門を遠望する民家のかげに立った住蓮は警固の意図を読み抜こうとする。

「よもや僧形のわしらに手出しを致しますまい」

生蓮房宗実は民家のかげから出てゆこうとする。

「待て……」

袖をおさえた。

今朝、小松御堂を去って此処へまで来た住蓮たちのねらいは、屋敷の主、右大臣頼実と面会することだった。宗実が、かつては兄弟の縁を結んでいる。その旧縁にすがって住蓮のおもわくを買きたかった。だがこの様子では門前払いを喰いそうである。

いや、門前払いだけで済めば未だいい。住蓮は不吉な予測を胸でえがいた。

「僧形ゆえ、かえって危い。一網打尽に引っくられてしまうかもしれない。それではわしらの意が宰相に通じない」

「なぜでしょう」

「奴らの警戒、その相手はわしらひじりにあるのではなからうか。ひじりどもの一斉蜂起を恐れている」

しゃべりながら住蓮は現状把握がようやく鮮明になってきたことに気づいた。

すでに逮捕された安楽房遵西が、拷問を受けながら強気な発言を司直にぶつけたのではあるまいか。今に見ておれ。洛中洛外の専修ひじりたちが大挙して襲撃してくるぞ。そのときになって吠えづらをかくな！

安楽房は頭脳明敏な男だが、同時に軽はずみな狂燥癖もある。拷問に、カッとなり易い性格なのだ。

だから今、二人がこのこ黒大門へ近づいたら有無を言わずに捕縛されてしまうだろう。正当な取調べ——つまり自分たちの言い分に耳を傾けてくれればいいが、そんな言い分を無視して殺されてしまったては、大死では

ないか。

ここは何としても右大臣の頼実とじかに会い、動かし難い証人と対決して、事件の方向をねじ曲げなければならぬのである。

右大臣頼実、旧冬後鳥羽院から「兵杖の権」を賦与されている。

兵杖の権——兵は軍事である。杖は警察権だ。

なぜ杖が警察権になるのか。警杖で容疑者を逮捕するからである。ところがこの杖が、いつのまにか容疑者の死命を制する凶器に変質してしまった。

容疑者を逮捕拘引、取調べる。そのさなか杖をふるって容疑者を死してしまふ。

杖刑という。法制上に明文はない。事故として扱われる。拘引ないし審理中、容疑者が抵抗するので杖を用いたら発作をおこして死んでしまった。まことにやむを得ない、というのである。

平安時代へはいつて藤原薬子の乱以来、死刑は廃絶されたというのが通説である。復活したのは保元ノ乱後の信西入道だった。源為義らを処刑した。

たしかに法制上の死刑はなかった。だが事故扱いの杖

刑は日常的だった。それも被害者は身分の低い連中である。

死刑よりも残酷で理不尽な杖刑だ。もしも専修ひじりの徒は有無を言わずにからめ取れ、という命令でも出ていたとしたら、黒大門の前で逮捕されてそのまま杖刑の厄に遇わないとも限らない。

この際、何としても右大臣頼実に接触しなければならなかった。

くわしい現状を生蓮房に語っている余裕はない。また語って聞かせても長年にわたって蓮花谷へ籠もりきっていた宗実では正確に理解できないであろう。

「どこか裏口はないかな」

潜入するしかない。この高倉邸、宗実が少年時代をすごした屋敷である。しのびこむ道を知っているかもしれない。

「裏口ですか」

宗実はあるため高倉邸の周辺を見やった。

あの枯れ木の林が、と屋敷の背後を指さした。吉田山から這いおりてきている雑木林だった。以前はあそこも経宗邸で、宗実が栗拾いなどをしたという。

「あれは御所の柵内だな……警固はもったときびしかる」

住蓮は高倉邸と区切る筑土の塀を見透かして落胆した。

「いつてみましよう」

生蓮房は俄かに活気づいた。しのび口を探がすことよりも幼時の遊び場をなつかしんだにちがいない。住蓮も黙って蹤いてゆくことにした。

大きく迂回して吉田山の裾から新御所の領内へはいりこんでいった。

すでに裸となった枯れ木が、わびしげに立ちならんでいる。霜にしいたげられた落葉は硬土と化した。

「この栗は美味だったのです」

と生蓮房は潜入という緊張感なぞ微塵も見せず、雑木林のあちこちを嗅ぎまわるようにして歩く。住蓮も彼の意にまかせた。しかし、周囲へ眼をくばることは忘れなかった。何と言っても此処は「禁闕」である。警吏に発見されたらたちまち引くくられるであろう。

「昔、ここで栗を拾っていたら突然、美しい少女がはいってきたのですよ。屋敷では見かけない顔なんです」

生蓮房の眼は懐旧でうるみかかっている。

「幾歳ぐらゐのときだね」

「十四、五歳でしたか。栗は一杯落ちていますが彼女にはイガを剝くことができない。拾いあげて、指をかけようとすれば、すぐに取り落してしまふ。私は自分が持っていた分をそっくりやっただけです」

「喜んだらう」

「そりゃもう。すぐに白い歯をむいて皮を取り、食べはじめました」

なぜそんな話をはじめたのか。

住蓮は、髭の底にかくされた宗実の透明な輝くばかりの地肌を、しげしげと眺めた。ふと、別の顔が思いうかんでくる。

胸の底で、こんな反省の自問がひびきかえった。

お前は彼女と対決するという。だが本音は彼女との再会を熱望しているのではないか。

「それで……」

と宗実に話の続きをうながしながら、住蓮は自問する。

しかしその再会に俺は命をかけている。命を。

自問の声はいよいよ鋭さを増す。

命をかけることがそんなに重要か。阿弥陀仏にさげたはずの命を、自分にかけてしまふなど、とんでもないあやまちではないのか。

宗実の声が現実の大气のなかでひびいている。

「その乙女は、近江中納言の息女ということでした。父につれられて屋敷へきていたのです。じつはこの林での出会いは「見合い」でした」

「見合い？」

「ええ、わたしの妻となるかどうかの」

「それで、妻にしたのか」

「いや、話がそこまですすむ前にあの動乱でした」

「世を捨てねばならなくなったわけか。その後、近江中納言の息女がどうなったか知っているかね」

「知りません。知りたくありません。所詮は縁のなかつた人だからです。ただ、いまここへきてみると、あのときの場面だけが思い出されるから不思議です」

「不思議……なあ」

「どんなに修法をつんでも、信心を深くしても、いよいよというときは一つのことしか胸に思いうかばないので

はないでしょうか」

「いよいよというとき、それはどんなときだね」

「どんなとき？　人によってそれは異なるでしょう」

「そうだろうなあ」

住蓮は妙に共感を強くしたくなった。

宗実にとっては今こうしてこの曾遊の地を訪れて、自分にとっては最後の死におもむこうとするときになるのだらうか。

「これで蓮花谷へ帰っても、当分この林のことを、あの

人の顔を思い出すかもしれませんね」

「修法のさまたげになるかな」

「さまたげになってもかまわないと思います。それだけ自分が広い天地に立つことを意味するからです」

「しっ……」

「広い天地に立てば、その分だけ信心も深くなるのでは」

「黙って。おい、そこへ身を伏せろ」

住蓮はあわててかたわらの木株を指示した。自分も柵の根もとへ身を倒した。

林が切れるあたり、築土のかけから人影があらわれた

のである。

三

男女の二人づれであった。

生蓮房宗実の幻想が現実化したのであれば、若者と早乙女でなければならぬ。だが、およそ似つかわしくない組み合わせだった。中老の男女である。しかも男は僧である。

「住蓮どの、あれは……」

驚きのささやきを洩らす宗実を手で制した。そのとおり、僧はあの明遍僧都ではないか。つれの女性はいったい何者であらうか。

ふたりは築土に添って往きつ戻りつしている。かわす言葉の内容は聞き取れない。

住蓮は築土の形をとっくりと見直した。その西端が切れている。崩れ落ちたのではなく、きずいた時点でそこに空隙がしつらえてあるのだ。つまり高倉邸から新御所内へ直通の道ができていたわけだ。これは秘密なのか、公然のルートなのか。

明遍はいま高倉邸から出てきたのであろうか。そして
つれの女性はおちらの人物なのだろう。

林のなかへ二人がはいってきたら、立ち上がった声を
かけねばなるまい、と住蓮は覚悟した。だがやがて、築
土を離れた二人は御所の本殿の方へ去っていった。

「あの女人はたしか……」

根株から身を起しながら生蓮房がつぶやいた。

「知っているかね」

「大納言宗頼卿の内室だった人」

「宗頼卿の……それでは卿三位ではないか」

現在は右大臣頼実の妻となり、後鳥羽院政かげの女宰
相とうたわれる卿三位兼子その人である。

兼子なら新御所へづかづかとはいりこんでも何の不審
もない。ただそれに明遍が同行するとは、どういうこと
であらうか。

住蓮はあれこれと政略路線をなぞってみた。

「帰ろう」

「もう、よろしいのですか」

進入してきた山寄りへ林間の道を引き戻す住蓮を宗実
はいぶかった。

「よろしいも何も、右大臣に会う手だては全くない」

「お役に立たないで」

「いや、そもそもおぬしのような捨てひじりに昔の縁な
ぞをたどってもらおうと思ったことが間違いだった。さ
ぞや心苦しかったであらう。許して下さい」

率直にわびた。

「では、もう蓮花谷へ帰ってもよろしいでしょうか」

「お帰りなさい。そして、信心だけを固められるがよ
い。都はすべてが不浄だ」

「すべてが不浄、ですか」

林を離れかけて宗実は、あとを振りかえった。

不浄だとはかりは言いきれまい。遠い清純な思い出が
一点だけ、あの落葉のなかに生きている。清純なままで
結ばれずに時代の波で踏みにじられてしまった若葉の
恋――

「住蓮どの、お別れするには何か名残りが尽きぬような
気が致します」

宗実は妙に人恋しそうに語りかけてきた。

「……」

この男、外見は愚鈍にみえて勘は鋭い、と住蓮は思っ

た。名残りが尽きぬとは、住蓮の死を予知しているのではないだろうか。

「いま一度、昨夜のように念仏をお唱えしたいものです」

昨夜、法然上人のいます小松御堂で修めた念仏のことを思い出しているのである。

「丁度いい場所がある」

住蓮は、明遍が帰るはずの東山光堂への道をいったん捨てた。きびすを返して北上した。吉田山の東壁へまわりこむ。そこに真如堂があった。

洛中に初めて建てられた常行三昧堂である。戒算上人が比叡山を出て、慈覚大師の作になるといふ阿弥陀仏像をここに安置、九十一歳の高齢まで念仏三昧で送ったのが真如堂の創建だったと言われる。

その縁起に法然上人から熊谷蓮生房（直実）へ送った書状の写しがある。日付は建永二年（一二〇六）正月朔日。まさしくこの法難惹起の年始にあたっている。

文中に興味深いくだりがある。

——（前略）マタ勢観房へ書テ授ケ候、金色ノ名号ア

マリニ欲シサニ押シテ取ラル由。ウケタマハリ候。是ハ罪カクルシカラカノ御タツネ承ハリ候。タトヒ罪ニナラズトモ他人ノ物ヲ押サエテ取ル法申シ候。ソノ上大ナル罪ニテ候。急ギカヘサレ候ヘ是モハラノ惡シキカラ老ユル事ニテ候。志ハアハレニ候ホドニ名号書テ参リ候。ワキノ歌ハ真如堂ノ如来ヨリ授ケ給ヒ候歌ニテ候。金色ニシタク候ヘドモ急グヒニキニテ候ホドニ墨ノママ参リ候。京ト国ト程遠ク候ホドニ、シルヘニ判ヲ加ヘテ参リ候。惡筆ニテ人ノ見候処ヲハバカリナガラ師弟ノ契約ニテ候ヘバ、カツウハ形見ニ候。穴賢

法然はこの名号を「形見」として贈ると書いている。迫り来る法難の嵐に再会は不可能と判断したのであろうか。

珍しく身辺の小事にふれた書簡である。しかも時が時だけに、さまざまな想像がめぐらされる。

この書簡からもわかるように法然がしばしばこの真如堂へきて籠もったことがうかがえる。真如堂の如来から授けられた歌とは、

唯たのめよるずの罪は深くとも

われ本願のあらむ限りは

くり返し書いておく。

法然流罪直前の横顔、生活の一端がしのばれないであろうか。

住蓮と生蓮房宗実とは、ほの暗い常行三昧堂の奥へ坐りこんだ。

修法中の僧は誰もいない。法然が、歌を授けられたという阿弥陀如来だけがその温容をたたえている。この阿弥陀如来との「歌の交信」からも法然における「第三の回心」が裏付けられぬであろうか。

高野山の蓮花谷へ帰ってゆく捨てひじりと、師に迫る法難に身を以てぶつかろうとする住蓮。

だが兩人の念仏合唱は、さわやかにかつおだやかに堂内へ流露しつづけたはずである。

生蓮房宗実と別れた住蓮は、ひとり光堂へやってきた。未だ明遍僧都は帰っていなかった。

方丈へあがりこんで、端座して待つことにした。どん

な語り口であの僧都を説得したらいいか、その方法ばかりを考えている。

当初はとことん欺ましてしまおうか、と思った。だが敏感な明遍がそんな欺まし口に乗ぜられるはずはないと気づいた。本音をぶちまけるのだ、本音を。

だが迷いは残る。

本音をぶちまけてしまえば、明遍は逆に思いとどまるよう住蓮を説得にかかるのではあるまいか。

説得するか、説得されるか。

そうだ。これこそ真の教化であろう、と住蓮はひとりうなずいた。説得しきることは明遍を立派な念仏ひじりに改造する結果になるではないか。念仏ひじりになってくれば、間違いなく明遍は自分の意図に賛同するであろう。

だからこれは個人の頼みではない。正しい仏法を生かすか殺すかの岐路となる。菩薩行に通ずるではないか。

ようやく勇気が住蓮の胸に湧いてきた。

たしかに現在の明遍は迷っている。卿三位兼子と何やら密談をかわしていること自体、正しい仏法をねじ曲げる行為だ。その内容は知らないが、いずれは何らかの政

治上の取引きであろう。そんな問題に溺れこんだ分だけ
明遍は外道を歩きつつある。

正道へ引き戻してやるのだ。それがこの説得ではない
か。

足音が戸外でした。

無警戒に戸がひらかれた。もう薄闇がきていた。室内
が暗いままなので、明遍は住蓮の来訪に気づかない。

如来像の前まですすむと灯心をととした。夕べの看經
をはじめるともりらしい。

灯心の光りが、部屋の片隅に坐る住蓮の像をえがき取
った。

「おお、住蓮どのか」

「留守にありませんでございました」

「何の、かまわぬが……」

じっと見すえてくる。何かだいな用向きがありそう
だと直感したのである。

しかし、強い視線をじきに抜くと、首にかけた頭陀袋
をおろして中へ手をさし入れた。

「夕餉は未だであろう。いずれ本坊へ言ってやるが……」

唐菓子がある。餠餠（ふと）だ」

黄金色の団子を五、六箇、掴み出した。

餠餠（ふと）は油で揚げた餅だった。味はともかくも腹
はくちくなる。

「さるおとどの屋敷でもらってきた。わしはそこでたっ
ぷり馳走になった。みんな食べなさい」

卿三位からもらってきたのであろう、

住蓮は黙って手をのばした。

幼いころ、母がよく揚げてくれた味を思いうかべる。
なつかしい味覚だった。

明遍は裏へ降り立った。薪をくべている。白湯をわか
しているのだらう。

住蓮は一つ食べおわったとき、強烈な空腹をおぼえ
た。思えば今朝、小松御堂で粥を食べたきりだったので
ある。揚げ餅をたて続けに口中へ投げこんでいった。

「湯がわいたぞ。あまり急いで喰うと餅は胸につかえ
る」

腕に、ぬる湯をなみなみとついしてくれた。どこまでも
親切な男だった。

だがこの親切が、いつまで続くであらうか。

（つづく）

◎読者の皆様へのお願ひ――

弊会会員の年会費、つまり月刊誌『浄土』の年間購読代金を、既報の通り、三、〇〇〇円といたしました。その後会員諸兄の暖かいご配慮、ご支援をいただいてまことにありがたく思っております。

さて、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、新たに「読者のコーナー」を設けたいと思います。左記要領で、どうぞ振ってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

一、内容 自由 (生活の一コマや所感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。)

一、枚数 四百字用紙五枚程度

一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十八巻 六月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十七年 五月二十五日 印刷

昭和五十七年 六月 一日 発行

編集人 宮 林 昭 彦

発行人 佐 藤 密 雄

印刷人 関 二 三 男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

